
神の世界で踊る者

nab42

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の世界で踊る者

【Zコード】

Z5611T

【作者名】

nab42

【あらすじ】

兄を殺されたオルガと、恋人を殺されたピピ。四つ神が創つたとされる世界で、二人は復讐へと歩を進める。

ヘクルブル大陸の最東にある国、アウグスト。その国にあるアメルという街は海に面していた。街は崖に沿つて作られており、住民の多くはそこに家を建て住んでいた。街の大きな通りは海に平行して三つあり、一番上の通り沿いにはホテルやレストランが、真ん中の通りには役所や商店が並び、一番下には漁師たちの組合と彼らの住処、そして馴染み客の集まる飲食店が集まっていた。

この街の主な特産物は牡蠣や帆立といった貝類などの海産物、そして、街の後ろにある丘や山にある畑から採れる夏みかんである。それらは海路でアウグストの首都や同盟国、東の大陸へと運ばれる。だが、これらが一番の産業ではない。この街の主な産業は観光業だつた。この地域の気候は抜群に良く、夏は涼しく、冬は比較的暖かかつた。そのため避暑地や避寒地として重宝された。雨季は十月に十日ほどあるが、それを嫌に思う人はいなかつた。アメルの人々にしてみれば、それは観光客のあまり来ない休みの日として、大いに喜ばれた。さらにアメルの東には、ゴルトンと呼ばれている島があつた。そこを訪れるために、まずアメルで一泊するというのが多くの観光客の常であり、習わしのようなものだつた。島には高さが異なる塔がいくつも建つていた。一番高い塔はアメルの街からも見え、日の出と共に、その塔の影が街へと流れた。その塔の頂上からは世界が一望できるといつた噂もあつた。島にある塔は誰がどうのよう建てたのか分かつていなかつたが、人々は、誰が疑うこともなく神が建てたのだと確信していた。問題は、どの神が建てたかということだけだつた。あるものは海の神だと言い、あるものは島の神、もしくは空の神だと言つた。だが、アメルの人々は星の神だと信じていた。アメルという街は元々、星の神を信仰している人々で作った街なのだ。

この世界は火の神、水の神、風の神、土の神の四つ神が創った。その世界から様々な神が生まれた。それらの神は四つ神のいずれかを親に持ち、その他の神に兄弟を持った。多くの神は自然を創り、司つたが、一級神であつた生死の神は、一級神になるため動物を創つた。そして、その時生まれたのが戦いの神であつた。生と死の神は、この事を四つ神に伝えず、自らで管理しようとする。だが、戦いの神は生死の神には従わず、どんどんと力を蓄え、攻の神と守の神という新たな神を作りだした。戦いの神は攻の神と守の神を使い、生死の神を二つに分け、生の神、死の神とした。二つの神は自らが生み出した子神、戦いの神に支配された。同時期に戦いの神は人間を作る武具に目をつけた。そして、生の神と死の神を使い、争いを起こさせる。それは四つ神が創りだした世界を自分のものにするためだつた。その頃、ようやく四つ神は世界の異変に気付く。しかし、戦いの神の力は強大なものになつており、人々は神界に届く山、ベドザリーでさえも戦を繰り広げていた。四つ神は争いを収めるために龍人と呼ばれる神の使いを世界へと送る。彼らは人々を四つ神から授かつた様々な神力で抑えた。しかし、戦いの神は人々をさらに焚き付け、神殺しの命を出す。その勢いは龍人たちにも抑えることが難しく、四つ神はついに自らが創つた世界において、戦いの場に出てきた。これを待つていた戦いの神は四つ神を殺そうとするが、四つ神は抵抗し、相討ちとなる。この時に全ての神の力は弱まり、世界に溶ける。全ての神は力を蓄えるために、長い眠りについた。残つたのは神の創つた世界、自然や動物、少しの人々と龍人、そして人々の作った武具。ベドザリー山に埋もれた武具は神武具と呼ばれている。それらには神の力が宿つており、錆びたり、折れたり、欠けたりすることがない。

「それが、この世界の簡単な歴史だな」

オルガルデペリオは、若い漁師が小さな子供たちにそう説明するのを聞きながら、パンと帆立入りのスクランブルエッグを食べてい

た。本当に簡単な説明だなとオルガは思つたが、それに何を付け足すべきかは分からなかつた。

小さな食堂がある第一通りでは、漁から帰つてきた父親と遊ぶ小さな子供たちがたくさん見られた。オルガは週に四日か五日は、それを見ながら昼食をとるのが日課だつた。

オルガは宿屋で働いていた。一番上の第三通りにある、観光客用のホテルではなく、出稼ぎに来た人や、旅人のための安宿が彼の職場だつた。主な仕事は部屋の掃除だつた。だが、それだけで食つていくことは出来ず、近くにある食堂やパブでウエイターや手伝いをして暮らしていた。しかし、多くの人がそれらを彼の仕事だとは思つていなかつた。彼は多くの人が思つてゐる彼の仕事の事を、「お遊び」と呼んでいた。実際、それは彼にとつて簡単に出来ることだつた。他人はその「お遊び」を拍手喝さいで迎えてくれるが、彼にとつて自慢できるものではなかつた。だが、その「お遊び」がいい小遣い稼ぎになることは承知していた。

「今日も投げるのかい？」と腕を振りながら若い漁師が食堂に入つて來た。

「たぶん、投げるよ。今日はアンジェホテルで投げるんだ」

「へえ。じゃあ、随分稼げるな」

「そう願うよ。でも、もうすぐ雨季だからね。あんまり人はいそくにはいよ」

「お前の仕事にも時期つていうものが、あるんだな」

「そういうものは何事にもあるよ。それよりも、賭けるかい？」

「はっ」と若い漁師は笑つた。「賭けになるもんかい」

日が沈むと、オルガは階段を上がり、第三通りへと出た。そして北に少し歩いた。アンジェホテルの、噴水や星の女神の彫像がある玄関を通り過ぎ、隣のホテルの壙とアンジェホテルの壙の間にある細い道へと入つた。その道を進むと、少しひらけた場所に出た。アンジェホテル側の壙には、縦長の入口があいていて、その上には同じ材料で作られた質素なアーチがかかっていた。オルガはそこに入

つて、アンジェ ホテルの裏口から中へと入った。

宿泊客が食事をとつている会場にオルガが入ったのは、彼らがデザートを食べ終わり、食後にブドウ酒を飲んでいた頃だった。彼は普段着ない、恭しい服装に着替えていた。皺一つない黒いズボンにパリツとした白く清潔なシャツは着心地が悪かつた。

司会者はオルガを、海が見える一番目立つ場所に移動させた。

「さあ！ ここにいる若い青年！ 歳は十七だが、腕は確かだ！

ええ？ 何をするのかって？ もちろん、お客様も分かつておられるでしょう。この青年、この歳でナイフ投げの名手なのです」と口ひげを上品に生やした司会者は言つて、オルガの左手を掴んで掲げた。

驚いたか驚いていないか、宿泊客は拍手で彼を迎えた。オルガはその反応を、ありがたいと思つたかのように笑顔をつくり、軽くお辞儀をした。

「名をオルガルデピリオ。そう、街の近くにある星の神の使いが現れたという丘を守りし一族の一人であります。黒い髪に数本見え隠れする金色の髪。これが星の神に関係しているという何よりもの証拠。彼は星の腕と名付けられた通りに、この両腕でナイフを操ります」

この司会者は外見とは違い、お喋りにあまり気を使わないのかな、とオルガは思った。星の腕。今は亡き両親が彼に付けた名前だつた。「さあ！ さつそく、その技を見せていただきましょう。まず、あそこにある的。あれにナイフを当てる貰いましょう」

オルガは司会者が手で示した方向を見た。オルガが入つて来た扉の横に、大きく輪切りにされた木があつた。直径はオルガの片腕くらいだった。

オルガは腰に隠していたナイフを手に取つた。客は彼を鼓舞するかのように拍手をした。彼は客の緊張を高めるため、拍手が消えて静かになるまで間を置いた。ワイングラスがテーブルに置かれる音や衣擦れ、客のひそひそ声が目立つてくると、ナイフの柄を握り、

的の方へと投げた。ナイフは回転せずに、ほぼ真っすぐの軌道で空中を進んでいった。客はそのナイフの軌道を、首を回しながら追いかけた。オルガを見ていた多くの目が、一斉に反対側に向くのをオルガは楽しんだ。ナイフは見事、的の真ん中に突き刺さった。

彼には、その「お遊び」は簡単なことだった。目を閉じても出来た。寝ていてもできるかもしかなかつた。だが、それは星の守り人として生まれただけでは習得できないものだつた。子供の頃から、ナイフを投げてきたからこそ出来るものだつた。

その後、オルガはいくつかの木のためにナイフを投げ、テーブルに並べられた蠟燭の火を消し、最後は美女の頭の上に乗せたフルーツに投げた。客は彼のために、いくらかのお金をテーブルに置いて、会場から出て行つた。疲れた者は部屋へ、飲み足りないものはバーや街へと出かけた。給仕は食器を片づけ、オルガのために置かれたお金を集めめた。オルガはその中からいくらかを貰い、控室に戻り、普段の着心地のいい服装に着替えた。皺のあるパンツに、柔らかいシャツが彼のお気に入りだつた。

ホテルを出て通りに出ると、「終わった?」と女がオルガに話しかけた。

「終わった……けど」と彼は躊躇いがちに返事をした。

「じゃあ、お金くれない?」と女は言った。

女は銀色の長い髪と淡い金色の瞳を持つていた。目元は大人っぽく上品で、落ち着いた雰囲気を表していたが、頬は少しふくよかで、幼いと思わせた。そんな複雑な印象を彼女は持つていたが、ほとんどの男は彼女のことを「美女」と呼んだ。

「嫌だよ」

「なんでー? 頂戴よ」

「お前ね。自分で稼いだらどうなの? そんな外見なんだし、体を売れとは言わないけど、お酒を注ぐだけでも稼げるだろう」

「嫌」

彼女がそう言つと、オルガは渋々、今さつき貰つたお金の半分を彼女に渡した。

「ありがとう。さすがオルガ」

「また酒に使うの？」

「半分はそう。半分は洋服代とかに消える」

「ああ、そう」とオルガはため息まじりに言った。

「うん。じゃ、私はこれで」と彼女は手のひらをオルガに見せて、下へと続く階段へ消えた。彼女がはいていたロングスカートの赤い色がオルガの目にまとわりついた。

「ピピのやつ……」。そう呟いて、オルガは彼女の心境について考えた。だが、詳しいことは何も出てこなかつた。彼女の心境について考える時、オルガの頭に出てくるのはいつも兄だつた。ナイフの投げ方を教えてくれた兄。そして、兄の恋人だつたピピ。

オルガは空を見上げた。いくつもの星が瞬いていた。

兄の事を考えた。オルガより、八つ年上だつた兄。不思議な力を持つていた兄。血の繋がりがない兄。それでも仲良しだつた。

そんなことを考えていると無性に悲しい気持ちになつていて。お酒を飲みたいな、オルガはそう思つたが、それを本気で欲するほどではなかつた。だが、ピピはどうだらうかと考えた。そうすると、また兄が出てきた。

「ああ！」とオルガは大声を出した。そのせいで、通りにいた何人かは驚き彼を見た。

オルガはピピと同じように階段を下つた。だが行く場所は違つた。彼は明日のために、今日はもう寝ることにした。

太陽が海面からしつかりと姿を現した頃に、オルガは目を覚ました。

オルガの家は、第一通りと第一通りの間にあった。料理店をやっていた両親が残してくれた家で、四階建ての三階部分がそれだつた。リビングとキッチン、バスとトイレが付き、大小合わせて、部屋は四つあつた。一つは両親の部屋、一つは兄の部屋、一つは書斎、最後の一つがオルガの部屋だつた。彼の部屋には子供の頃から使つていたナラの机、腰までの高さの本棚、大きめのクローゼット、そしてベッドが二つあつた。

オルガはベッドから起き上ると、まず海側についている窓を開けた。この季節の朝は肌寒く感じるが、海から来る風は、彼の朝にはなくてはならないものだつた。潮の少し生っぽいにおいは、彼に幼少時の記憶を思い起こさせた。

ギギッとベッドが軋み、衣擦れの音がした。オルガは自分が使つていらないもう一つのベッドを見た。そこには案の定、ピピが眠つていた。寒そうに毛布を体に巻いて、壁の方を向いて寝ていた。

ほとんどの朝と同じ朝だつた。オルガが毎朝、窓を開けるのは部屋の中に籠つているアルコール臭を逃がすためだつた。

窓からは下にある住居の屋上が見えた。屋上では役所で働くおじさんが、体操をしていた。

「おはよう」とおじさんはオルガに気付いて挨拶をした。

「おはようございます」とオルガは返した。

これもほとんどの朝と同じだつた。

窓を開けたまま、オルガは寝間着から、仕事着に着替えた。彼の体には少し大きすぎる、ゆつたりとしたシャツと、何か所か破れたところを補修したズボンが彼の仕事着だつた。

オルガは家を出て、まず第一通りに出た。そして、水売りから水

を一杯買い、それを飲んでから食堂へと向かった。

食堂には誰もいなかつた。テーブルには、使用済みの食器がいくつか乗つていた。そして、何匹かの猫もテーブルの上で横になつていた。

オルガは職場の一つが、この食堂「猫」であつた。名前の由来はもちろん、食堂に集まる猫からだつた。何匹出入りしているか、正確な数は分からなかつたが、少なくとも十匹はそこを根城としていた。

オルガはテーブルにあつた食器を、キッチンに持つていった。キッチンには多くの食器が洗いものとして置かれていた。それを女将さんの代わりに洗つのが彼の仕事だつた。

仕事は何の問題のなく進んだ。瓶に貯めてある水で食器の汚れを洗い流し、布巾でそれらを拭いた。そして、食器棚に戻した。

「すまない。誰かいるかい？」

ほとんど片がついた頃に、誰かが食堂の方から呼んだ。

「はい」とオルガは返事をしながら、声がした方へと向かつた。

麦で編んだ帽子を被つた男がそこにいた。帽子には小さな穴が空いていて、彼が着ている服には汗染みがあつた。深い青に染められていたシャツは、さらに濃い色になつていた。目線を下げるとき、腰に長剣が差してあつた。

「どうかしました？」

「いや、飯は食えないのかい？」と男は頬にある無精髭の感触を確かめながら言った。

「ああ、朝はもう終わりましたよ」

「そうか。でも、なんでも良いから貰えないかな。パンでもいいんだ。金ならある」

「ええ、まあ、簡単なものなら僕でも作りますけど」

「じゃあ、頼む」そう言つて、男はテーブルに座つた。

オルガはキッチンに戻り、ベーコンを焼き、卵を目玉焼きにした。そして、トーストを皿に盛つた。それを彼のテーブルへと持つてい

つた。

「ありがとう」と男は言つて、汚れを落とすように手を叩いた。「

いくらだい？」

「五モールでどうです？」

「いいよ」と男は言つて、ポケットから一モール硬貨を五枚出した。

「旅人ですか?」とオルガは聞いた。

「みたいなものだよ。あ、飲み物はあるかい?」

「ブドウ酒でいいなら」

「いくらだい?」

「一杯一モールです。水が飲みたいのなら、水売りから買つてください」

「ブドウ酒をくれ」

オルガは男にブドウ酒を渡し、代金を貰うと、残りの仕事を終わらせにかかった。そして、それはすぐに終わり、残す仕事は男が使つている皿とコップを洗い、水滴を拭き、食器棚に戻すだけになつた。

オルガは椅子に座り、テーブルの上に寝転がつている猫を撫でながら、男の背中を見て、考えた。男の歳は三十くらいだろうか。腰に剣を差しているが、あれは幾らだろうか。どこの出身だろうか。何のために、このアメルの街へ来ているのだろうか。そんなことを思案しているうちに、オルガは思った。なぜ、彼は帽子を脱がないのだろうか、と。しばらく考えたが、答えが出る前にオルガは、今夜のことを考え始めていた。今夜はレストランで「お遊び」だった。レストランでの報酬は、店からいくらか貰うだけだったので、それほど稼ぎにはならなかつた。

「うん。おいしかったよ」と男は言つて、椅子から立ち上がつた。そして、オルガの方を少し振りかえつて、手を上げ、食堂から出て行つた。逆光で、男の顔はよく見えなかつたが、髪の毛の色が明るかつたような気がした。

食堂での仕事が終わると、次は宿屋へと向かつた。食堂から南に

少し歩いたところに宿屋はあった。一部屋にベッドが四つある安宿で、客のほとんどが若い旅人だった。

「おはようございます」とオルガは、玄関前を掃除していたオーナーに挨拶をした。

「おはよう、オルガ」とオーナーの男は返した。

この男は、アルベスオ・ピリオンといった。オルガと同じ姓を持つ、星を守る一族の一人である。

街のはずれにある丘には星の降臨地と呼ばれる遺跡がある。そこには直径が数メートルある大きな穴が開いていて、その周りに大きな岩がいくつか並べられている。街に残されているある漁師の伝記によると、ある日、そこに星の神の使いが舞い降りたとされている。その使いは、ただの小さな村だったこのアメルを数日で大きな街に発展させたという。その後、その使いは大きく開いた穴に入ると消えてしまった。アメルに住んでいた人々は、使いが現れ、消えた場所を神聖な処とし、守ることにした。その時に姓をピリオンとし、代々それを受け継いできたのが、星を守る一族だつた。一族かそうでないかを見分ける方法は二つあった。一つは姓、もう一つは髪の毛だつた。一族のほとんどは黒髪で、その中に数本の金髪を持つていたからだ。

「明日は、降臨地に行くんだろう?」

「はい。明日は僕の番です」

「今日は、うちの息子だよ。ちゃんとといえばいいんだが。オルガと同じ歳だというのに、あいつは辛抱が足りないからな」

オルガはどういった反応をしていいのか分からず、少し笑つて宿屋の中に入った。

宿屋の小さなフロントにはアルベスオの娘、クレルがいた。

「おはよう、クレル」

「おはよう、オルガ」

クレルはいつものように長い髪の毛を後ろで一つに括っていた。

仕事をしている時は、いつも彼女はそうしていた。

クレルはオルガの一つ年上だった。だが、オルガは彼女の弟よりも、彼女と遊ぶ方が多かった。そのせいか、弟はオルガをあまり好きでいなかつた。女と遊ぶ変なやつと思っていたし、姉を見るのではないかと、ある種の嫉妬心を持つていた。クレルは対照的にオルガを一番の仲良しとしていた。成長してもそれは変わらなかつた。恋愛感情はないけれど、夫にするならば彼は申し分ないと人と思っていた。

「今、どの部屋が空いているの？」

「三番と五番……と、七番が空いてるね」とクレルは宿帳を見ながら答えた。

「三番と五番と七番ね」とオルガは繰り返した。

オルガは空き室で使われていた布団を屋上に持つていき、物干し竿にかけた。ベッドのシーツは全て中庭に持つていった。それをクレルが大きな桶で洗い、その間に彼は空き室の窓や壁をはたき、床を掃き、水拭きをした。それが終ると、シーツと布団を新しいものに替えた。最後の仕事は中庭にあるシーツを屋上に持つていき、物干し竿にかけ、干すことだつた。屋上へ行くと、いつも通り、最初に干していた布団はクレルによつて取りこまれていた。

シーツを全部干し終わると、クレルがやつて來た。
「相変わらず仕事早いね」とクレルは言い、後ろに纏めていた髪をほどいた。

「そつちこそ」

「そんなに頑張つても、お父さん、あんまりお金くれないよ?」

「いいよ。いらっしゃいだよ」とオルガは言つて笑つた。「父さんが寝込んだ時、一番に助けてくれたのはおじさんだつたからね」「もう一年だね」

「うん。もう一年だよ」

「パパさんはどう? 元気?」

「元気だよ。毎日、お酒飲んでいるからね」

「ふーん」

オルガとクレルは屋上に置いてある椅子に座り、海を眺めた。こ
こでしばしの休憩をとるのはいつものことだった。しばらくすると
二人はお互いを見つめた。そういう行為に恥ずかしさは全くなか
つた。

「そういえばね。最近、なんか変わったお密さんが多いの」
「変わったお密さん？」

「うん。ちょっと怖くて、腰に剣を差していたり、背中に剣背負つ
たりしている人たち。お父さんはハンターだろうつて。だから私、
夜はすぐ家に帰らされるの。仕事しなくていいのは嬉しいんだけど
ね」

「へえ。ハンターねえ……。じゃあ、今日見た人もハンターだった
かもしれない」

「どんな人だったの？」と言つて、クレルは片肘を手摺壁の上につ
いた。艶のあるさらりとした黒髪が、風で少しうなぎいた。

「麦わら帽子をかぶつていて……、あとは、剣を腰に差していく
…。それくらいしか覚えてないや」

「ふーん。まあ、私たちには関係のないことだよ。ハンターが誰を
捕まえにこの街に来ているのか知らないけど、早くどうにかなつて
欲しい」

「どうにか？」

「そう。どうにか……何事もなく」

「何事もなく」

「うん。何事もなく、いつも通りに」

「」の日の最後の仕事である、レストランでの「お遊び」が終わる
と、オルガの前には昨日と同じようにピピが現れた。

「こんばんは」ピピは言った。今日は緑色のロングスカートをは
いていた。

「また飲み代？」とオルガはポケットに手を突っ込みながら言った。
ピピは黙つて首を横に振つた。

「じゃあ、何？」

「お願いがあるんだけど」

「お願い？ そんなこと、今まで叶えてきたつもりだけどね」

「うん。でも申し訳なくて」

「申し訳ない？ それは驚きだな」

「え？ なんで？」

「そういう気持ちもあつたんだなと思つてさ」

「あるよ。ちゃんと」

「で、どうしたの？ 服だけじゃなくて装飾品も欲しくなつたの？」

とオルガは言い、鼻で笑つた。

「違うけど、三百モール貸して」ヒペペは手を出して言つた。無垢

な少女が言つたかのような軽い響きだった。

オルガは、彼女の淡い金色の瞳を黙つて見ていた。

自らの嘲りが無意味だったことにさえ、まだ気づいていなかつた。

レストランを照らしていくいくつもの炎は、自分はただ燃えるだけ、誰にも関しない、といったように燃え続けていた。通りを歩く人々もまた、何にも興味がないように黙々と自分たちが望んでいるだけの行動をしていた。だが、そう思ったのはオルガだけだった。炎にも人々にも他者に関係する余裕はあった。世界から浮いた存在になつたような、時間の神が自分だけを瞬間に残したような気がしたのは、オルガの気のせいだった。

オルガは強者に睨まれた動物のように、身動きを取らず、状況がどう動くのか辛抱強く待つた。

強者であったピピは、出した手を引っ込めず、そのまま一步前にでた。

オルガはその行動を見ていたが、それに対応して動くことはできなかつた。

「三百モール。お金貸して。くれって言つていいわけじゃないよ。すぐ返すし」

「いや……」とオルガは彼女の声に反応したが、言葉を受け取るには時間がかかった。「そういうこと言われても」

「これ、本当のお願いだから。何なら今まで貰つたお金も返す」

「いや……。その前に何に使うのですか、姉さん」

「姉さん？」とピピは、その言葉に引っかかった。「久しぶりだね、その呼び方

「いや……。何に使うのか教えてくれ」

「それは秘密」

「じゃあ、貸せない」

「じゃあ、貰う」とピピは笑顔を作つて言つた。

「貰う?」とオルガは怪訝な顔をした。

「ベッド、本棚、キッチン」

「ベッド、本棚、キッキン。確かにそうだな」とオルガはお金が隠してある場所を思い浮かべながら言った。顔に妙な笑い皺ができた。

「貸してくれないなら、貰うよ?」

「貰わない」

「じゃあ、昔みたいにかけっこするわ。」

「子供の頃と違うんだ」

「でも、どっちが早いか一目瞭然だよ?」

オルガは何も言わなかつた。確かに、競争を始めれば一目瞭然だらう。

「分かつた。だけど、ちょっと歩こう。最近何も話せていなかつたからね」

オルガがそう言つてゆつくつと南に向かつて歩きだすと、ペペは彼の横に付いて一緒に歩き出した。

「なんで教えてくれないんだ? 何に使いたいかくらい言つてくれてもいいだろ? 俺の金なんだ」

「うん」

ペペはもう言つたが、何も口に出さなかつた。オルガは仕方なく黙つて歩いたが、今度ばかりはお金を渡すつもりはなかつた。

今日は月が出ていた。そのせいで夜道は明るく、夜空に散りばつている星々は主張を穏やかにしていた。

「月がでてるね」とオルガは横を歩くペペに向つた。

「そうだね」

「昨日は出でていなかつたんだけどなあ」

「昨日も出でたよ」

「でも、昨日は見てないよ」

「見えてないだけだよ」

「そんなことつてあるのかな?」

「月も星の一つだよ。月の神は、星の神の親だもの。今、見えてない星があるよ?」、昨日は月が見えない番だったんだよ

ピピは白銀の髪の毛をかきあげた。彼女の横顔が耳まで、しっかりと見えた。すつきりとした、整った耳を彼女は持っていた。

「そういえば、神様のことをよく知らないな、俺は」

「星の神は出会いと別れの神様もあるのよ。知つてた?」

「へえ。知らなかつたな」

「うん……。だからね……」

「だから?」

家へと戻るために、いつも使つている階段を降りはじめるとピピは足を止めた。

「だから私は、あの人を殺したやつを殺すの」

オルガは振りかえり、ピピを見上げた。月明かりに照らされた女の顔には意思が強く表れていた。金色の眼差しはしつかりとオルガを捉えていた。オルガはまた身動きが取れなくなつていた。柔らかい、しかし、鋭い何かを彼は突き付けられていた。

「兄貴の……」

オルガはそう口を動かし、ピピの心持を計つた。そしてやはり、三年前に殺された兄、ピリオーノが次第に彼の頭を占拠し始めた。

ピリオーノは星の降臨地に捨てられていた。しかし、人々は捨てられていたとは言わなかつた。生まれた、そう言つた。

ピリオーノは金の髪を持つた子供だつた。星の守り人とは逆で、金髪に数本の黒髪が見え隠れしていた。

ピリオーノを引き取つたのは、ハキキセリオムと呼ばれていた男とその妻だつた。男の方は星の守り人で、女の方は商人の娘だつた。彼らに子供はなく、そのため強く申し出たのだつた。ピリオーノという名前も彼らがつけた。流れ星という意味だつた。

ピリオーノは一人で捨てられたわけではなかつた。星の降臨地の岩に置かれた彼の横には、一本の剣が置かれていた。細長い両刃の剣だつた。育ての親がそれを危ないからと遠ざけると、彼は狂つたように泣きはじめるのだった。

ピリオーノはすくすくと育つた。普通の子供と同じように、親を楽しませ、困らせた。しかし、彼はどこか不思議な雰囲気を持つ子供だった。暇があると星の降臨地へ行き、剣を振った。一日何もしゃべらず、岩の上に座つて何かを考える時もあった。そこには誰も寄せ付けないような空氣があり、誰もが興味を惹かれるような空氣があつた。

彼が八歳になつた頃、子供のできなかつた夫婦に男の子が誕生した。オルガルデピリオと夫婦は名付けた。ピリオーノは血のつながつていらない彼を拒絶することなく、誕生を素直に喜んだ。

オルガが歩けるようになると、ピリオーノは彼を色々な場所へと連れて行つた。街中を走り、丘を登り、山ではしゃいだ。彼が四歳になると、ピリオーノはナイフをプレゼントした。そして、ナイフ投げを教え、それを練習させた。

十一歳になつたピリオーノは、街で開かれた剣術大会に出た。結果、見事に優勝した。子供ながら、巧みな剣さばきを見せ、大人たちを驚かせた。街の自警団は彼を、仲間にしようとしたが、彼自身はそれを嫌がつた。「できるだけ自由でいたい」と彼は言った。

十七歳になつても、彼は働かなかつた。その日のほとんどを剣と他人と関わらない何かに費やした。

その頃に、ピピが現れた。彼女は街の人間ではなかつた。外からやつてきた人間でもなかつた。誰も彼女がどこからやつてきたのか分からなかつた。知つているのは彼女とピリオーノ、そしてオルガだけだつた。

彼女はピリオーノが赤ん坊の時から、ずっと一緒にいたあの剣だつた。ピリオーノの傍に置かれていた剣は、神武具と呼ばれていた神の遺産であつた。そして、ピリオーノ自身も神武具だつた。

神武具は、武具と様々なものが合わさつた混ざりものだつた。剣の姿だけのもの、動物に変身できるもの、人間に変身できるもの、または、その両方に変身できるものがあつた。ピリオーノは人間に変身ができ、ピピは人間と山犬の姿に変身できた。

しかし、ピリオーノには所有者というものがいなかつた。ゆえに、彼は武具の姿へは戻れなかつた。だが、彼がそれを悲しく思うことはなかつた。ピリオーノは何者にも、何事にも支配されたくなかつた。

彼が人間の姿をしたピピを剣に戻すことはほぼなかつた。ただ一年に一度、彼女を剣へと戻した。彼はピピに永遠に美しくいてほしかつた。彼女が人間の時に作つた切り傷や火傷跡は、その度に消えた。

ピピと一緒に住まわすために、ピリオーノは親に頼み、その条件であつた自警団に入つた。

そこで彼の力は存分に發揮された。彼の持つ雰囲気と剣技に、並の悪党はひれ伏し、それなりの悪党は切り殺された。

弟のオルガも、ピリオーノの薦めで十三歳の時に自警団に入つた。彼らの両親は反対したが、「何かあつたら絶対に守る」という長男の誓いを信用し、最終的には入団を認めた。ピリオーノと違い、親しみやすい雰囲気を持っていた弟は、すんなりと大人たちに溶け込んだ。ピリオーノは簡単な仕事を彼に任せ、自分は前と同じとはいかずとも、再び多くの自由な時間を得た。

ピピがいて、弟がいて、両親がいて、自由な時間があつて、自分がいた。幸せな時間だつた。

だが、それは自分の死によつて簡単に崩れた。一番信頼していたものから無くなつたのだった。

ピリオーノが二十二歳になつた年の夏だつた。グランドという盗賊がつくつた小規模の盗賊団がアルメにやつて來た。彼らは金に換えられるものを盗み、強奪し、それらを売りとばしていた。自分たちの求めるものを得るためになら、町を荒らし、村を燃やし、人の命を奪うことさえやつた。そして、その行為を悪行とは思つていなかつた。グランドにとつて、自分の欲望に背くことが一番の悪であつた。

ピリオーノがピピと星の降臨地で話をしていると、山の方から一

十名ほどの男たちがやつてくるのが見えた。彼は男たちの異様な雰囲気を警戒し、ピピを街に行かせ、自警団員にその事を伝えるように頼んだ。

「盗賊たちはピリオーノを発見し、近づいた。

一番後ろにいたグランドはピリオーノに聞いた。

「どこにいいものがあるんだ?」

「ここに」とピリオーノは言った。

「確かに、金は持つていそうだな」

「いや、金田のものは何も持つてはいない。いいものは全てここにあるけどな」

「なるほど。じゃあ、それを貰おう。だが、その前に聞きたい。あれは何だ?」とグランドは遠くに見える塔を指差した。

「あれは塔だよ。島にある。神が作ったそうだ」

「あそこにもいいものがありそうだな」

「さあ。行つたことないよ」

「いいものがありそうなのにか?」

「言つただろう。いいものは全てここにあるんだ」

会話が終わると、グランドとピリオーノはほぼ同時に剣を抜いた。それにつられるように、盗賊たちは各自の得物を手に取った。ピリオーノは剣を振り上げた。一人の男の両手首が宙にはねる。男の吐くような絶叫が耳に届いた瞬間、横にいた男の首筋は切り裂かれ、そこから勢いよく血が吹き出る。

その暖かいものがかかる男が、驚きの反応を剣に任せた。だが、ピリオーノは素直すぎるそれを避け、同時に剣を返し、腹を裂く。その中身が地面に落むるとグランドは飛び出した。

「お見事」

小さく声をひとつと、グランドはピリオーノの胸に剣を突き刺した。幾多もの、小さくも特異な存在を証明するに足りる武勇伝を残してきた男の、呆氣ない幕切れだった。

「俺を殺してどうなる?」とピリオーノは最後に聞いた。

「いいものを貰う」

「いいものだと？ そんなもの、もうなくなる」

「知っている。いいものだつたよ」

グランドが剣を抜くと、ピリオーノは草の上に倒れた。どす黒い血が緑を染めていった。

「あの島だ。あの島に行こう。まずは船だ。いい船を貰おう」
オルガが星の降臨地に着くと、ピリオーノは既にこと切れていた。
すぐに街へ戻ると、海の方を振りむいたが、そこにはピピがいた。
ピピはゆっくりと近づいてきて、倒れていたピリオーノを抱きか
かえた。そして、泣いた。全世界を一つの箱に入れたような、激情
の涙だった。

オルガはしばらく黙つてそこに立つていたが、徐々に体が地面に
近づいていった。膝をつき、頭を垂れた。

グランド盗賊団は、港で客船を奪い、島へと向かった。その間に
自警団が盗賊の五人を殺し、一人を捕まえた。残りの十人近くは島
に辿り着いたようだつたが、アメルの街へは戻つてこなかつた。

それからの三年はオルガにとって、最悪の三年だつた。母が病で
死に、それを追うように一年後に父親がこの世を去つた。家族は次
々と彼のもとから消えた。残つたのはピピだけだつた。だが、彼女
のことは彼には分からなかつた。分かるのは恋人を失つたという事
実だけだつた。

「誰も殺してくれないなら、私が殺すしかないじゃない。ううん。
私が殺したいの。私があいつを殺したいの」 とピピは言つた。

オルガは黙つて、その声を聞いた。そして階段を一段上つた。

「それで、どうしたいんだ」

「三百モールでハンターになるの。ハンターになつて、今、他のや
つらが捕まえようとしている男を捕まえるの。たくさんのお金を手
に入れて、あいつを探すの。他の国にいても、他の大陸にいても、
絶対にあいつを見つけて殺すの」

ピピは田から涙を流しながら言った。ぼろぼろとそれは零れた。
「なるほど……。やつぱり、話せてよかつた。最近は全然話してなかつたからな」

そうオルガは言つと、手を出した。

「探そう。あいつを探そう。姉さんの恋人を殺したあいつを、俺の兄を殺したあいつを探そう」

ピピは彼の手に手を置いた。

「オルガは三百モールも持つているの？」

「変に真面目なんだな。隠し場所は知つてているのに、中身のことは調べなかつたのか？」

「うん」

「持つてゐるよ。それくらい。大酒飲みがいるからな。それくらいないと心配で仕方がないよ」

ピピは涙を拭いて、オルガの手を握りながら、ゆっくりと階段を下り始めた。

オルガはピピの気持ちが少し分かって安心した。そして、最後の家族のためにできることはしようと星に誓つた。

数日前からアメルの街にハンターが集まり始めた。その原因は一つだった。賞金首の一人がアメルの街へと向かつたと噂がたつたからだ。

その殺人者の名前はオルトト。彼の犯した罪は、次の通りだ。

ドームス市の有力者である、イガノを殺害。金庫を荒らし、金目の物を窃盗。彼を捕まえようとした、用心棒を一人、兵士を一人、そしてハンター二名を殺害。その後、近隣の村で食料を略奪。五歳になる少年一人を誘拐（のちに解放）。

殺害されたイガノに良くない噂があるのは知られていたが、彼が近くの山に炭鉱作り、ドームス市に大きな金の流れを持ってきたのはそれよりも知られていた。イガノが死んだことによつて、市民と彼の周囲にいた人々は、炭鉱の行方、そしてこれから潤うのだと期待していた未来を心配していた。炭鉱が市に住む個人のもの、もしくは市営になれば御の字だが、もし國のものになつたのならば……。そう考えているのが大半だつた。

ドームス市と国は、ハンター協同組合を通じ賞金首だったオルトトに報奨金一千モールを上乗せして懸けた。その結果、賞金の合計は一千五百モールになつてている。賞金首としてはいい値段になつたと、ハンターは口角が自然に上がるほど喜んだ。

もともとハンターというのは兼業が多い。農夫、漁師、その他の職業に就いている人々が、小遣い稼ぎにやるのだ。そのため多くのハンターは自分たちの土地を離れない。彼らが動くのは、自分たちの土地に獲物が入つて来たときだ。

だが、今回のように多くのハンターが一つの場所に集まることがある。その場合、集まつて来たハンターの大半は専業になり、少数がその土地の者と、近隣の町や村からやってきた者になる。

このような事件が起きた場合、一番喜ぶのは専業ハンターで、一

番鬱陶しく思うのは町の人々だ。自分の町が物騒なものを持ち歩くハンターで溢れるのは誰もが嫌だ。とくにアメルのよつた観光の町で、治安が悪化するのは致命的でもあった。不幸中の幸いだったのは、もうすぐ町が休みへと入る雨季だったということだ。だが、幸いはそれだけだった。

「三百モールは持った？」

ピピには眠りから覚めたばかりのオルガを見下ろしていた。

「いや」オルガは一日酔いで痛む頭を押さえた。「今、どのくらいだろう？」

ベッドに座りながらオルガは考えた。昨日はどのくらい飲まされたらどうか。今は日が昇つてからどれくらいだ。今日は何があつたかな。

「あ」オルガは田と口を大きく開けた。「そうだ。食堂に行かないで。洗い物が」

そう言つとオルガは急いでベッドから立ち上がった。その勢いに驚いたピピは数歩下がり、自分のベッドに腰掛けることになった。「仕事辞めて、ハンターになるんだよ」服を急いで脱ぎ、大きなクローゼットから仕事着を取り出しているオルガにピピは言った。

「そんなこと」オルガはズボンを履いている。「出来るわけないだる」

「なんでー？ 昨日ハンターになるつて言つたじゃん」

駄々っ子のようだとオルガは思つた。

「ハンターになるのはピピだ。俺はいつも通り仕事をするよ」

「私、ハンターになるけどさ。オルガもハンターになるんだよ」

「はつ」オルガは嘲るように笑つた。「俺は六百モールも持つていよ」

「それは今、この町に来ている賞金首を捕まえればいいじゃん」

「捕まえられなかつたらどうすんだよ。俺は仕事を続けなきゃならないんだよ」

「えー？」

「どっちにしる、今すぐ辞めるわけにはいかないだろ。昼過ぎには帰つてくるから」オルガは洗濯していたシャツを着て、ズボンを紐で縛つた。「あ、勝手にお金取らないでね」

「……ねえ。他のハンターに先越されるかもよ」

「……」

「ねえ。分かつてるの？」

オルガは動きを止めた。ようやく起きた頭の中に甦つたのは、昨日、ピピとした会話だった。

自分は昨日何と言つたのだ。果たすべき責任は一つあるのではないが。

「……そうだつたな。……分かつてる」

「何が分かつてるの？」

「全部だよ。全部

「全部つて？」

「とにかく、俺は食堂とおじさんとのところに行く。昼過ぎに帰つてくるから、それまで待つて」

オルガはそう言つと、靴を履いて、外へ飛び出して行つた。

ピピはため息を吐きながら、窓を開けた。アルコールのくもつた匂いが充满している部屋に、冷たい潮風が入りこんだ。空は薄い雲に覆われていて、太陽はおぼろげに海の上から空へ飛び立とうとしていた。塔の影も薄く、町にその影は届いていなかつた。

ピピはずつと遠くを見た。暗くて重い感情が、彼女を内側から抱き締めた。助けを呼ぼうと恋人の名前を呼びたくなつたが、ピピは必死に堪えた。そうすると残るのは昨日誓つたもの一つだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5611t/>

神の世界で踊る者

2011年11月29日19時58分発行